

札幌大学総合研究 第六号（二〇一五年三月）

〈釈注〉

## 『封氏聞見記』 訳注（二）

高瀬 奈津子・江川 式部

本稿は、前稿に引き続き、唐の封演が撰した『封氏聞見記』 卷二の訳注を行う。卷二の篇目は、文字・典籍・石経・声音の四篇である。紙幅の都合から、本稿では、このうち典籍と石経の二篇の訳注を行う。

### 一、本文訳注

〔一〕『封氏聞見記』 卷二・典籍

#### 【原文】

漢承秦滅學、武帝開獻書之路、置寫書之官、由是外有太常太史博士之藏、内有延閣廣内祕室之府。成帝時、祕藏頗有亡散、乃使謁者陳農求遺書于天下、詔光祿大夫劉向校經傳、諸子、詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫監李柱國校方技。哀帝使向子歆嗣父之業、歆遂總會羣篇、著爲七略、大凡萬三千二百六十九卷。王莽之末、又被焚燒。光武遷洛陽、所載經傳二千餘兩。明帝尤重儒術。爾後撰錄、三倍於前。董卓移都之際、自辟雍、東觀、蘭臺、石室、宣明、鴻都諸藏典冊文章、竟共剖散、圖書縑帛、軍人以爲帷囊。及王允收而西者、纔七十餘乘。道路艱遠、復棄其半。長安之亂、一時焚蕩。

魏氏采掇亡書、藏三閣。祕書郎鄭默、始制中經簿、祕書荀勗、分經史子集爲甲乙丙丁之目、大凡九千九百四十五卷。惠懷之末、靡有子遺。西晉著作郎李充、以勗舊部校之、在者但有三千一十四卷。其後中朝遺書、稍流江左。宋元帝八年、祕書監謝靈運造四部目、凡四千五百八十二卷。元徽初、祕書丞王儉又造目錄、萬五千七十四卷。儉又別撰七志。有經典志、諸子志、文翰志、軍書志、陰陽志、術藝志、圖譜志。齊永明中、祕書丞王亮、又造書目、萬八千一十卷。齊末兵火、延燒祕閣。梁初、命祕書監任昉、于文德殿內集藏衆書、二萬三千一百六卷。普通中、阮孝緒更爲七錄。有典錄、記傳錄、子錄、文集錄、伎術錄、佛錄、道錄。元帝克平侯景、收文德殿書及公私經籍、歸于江陵、大凡十萬餘卷。周師入郢、並自焚之。

宋武入關、收其圖籍、纔四千卷。赤字赤紙、其字古拙。魏孝文始都洛邑、借書於齊、祕府稍充實。尙朱之亂、散落復多。北齊遷鄴、頗更搜聚。後周定目、書止八千、其後增至萬卷。周武平齊、先封書府、所加舊字、僅至五千。

隋開皇三年、祕書監牛宏、表請分遣使搜訪異本。每書一卷、賞縑一疋、校寫既定、本還其主。由是人間異書、往往間出。及平陳後、經籍漸多。煬帝限寫五十副本、分爲三品。於東都觀文殿東西廊屋列以貯之。大唐武德五年克平隋鄭公、盡收圖書。命司農少卿宋遵貴載之以船、泝河西上。行經底柱、多被湮沒、十存一二。其目錄四部書、大凡八萬六千九百六十六卷。除凶書、及刪去淺俗、無益教理者、見在三萬六千七百八卷、著在隋書經籍志。自後卷秩頗增。開元中、定四部目錄、大凡五萬八百五十卷。此自漢以來、典籍之大數也。

漢は秦の学を滅ぼすを承け(一)、武帝は献書の路を開き、写書の官を置き、是れ由り外に太常・太史・博士の蔵有り、内に延閣・広内・秘室の府有り(二)。成帝の時、秘藏頗る亡散有り、乃ち謁者陳農をして遺書を天下に求めしめ、光祿大夫劉向に詔して経伝・諸子・詩賦を校べしめ、步兵校尉任宏に兵書を校べしめ、太史令尹咸に数術を校べしめ、侍医監李柱国に方技を校べしむ。哀帝は向の子歆をして父の業を嗣がしむ。歆遂に群篇を総会し、著わして七略を爲る。大凡万三千二百六十九卷(三)。王莽の末、又た焚焼せらる(四)。光武洛陽に遷り、所載の経伝二千余両たり。明帝尤も儒術を重んじ、爾後の撰録、前より三倍す(五)。董卓の都を移すの際、辟雍・東觀・蘭台・石室・宣明・鴻都の諸藏典冊文章より、竟に共に剖散し、圖書縑帛、軍人以て帷囊と爲す。及び王允の収めて西する者は、纔かに七十余乘。道路は艱遠、復た其の半を棄つ。長安の乱、一時に焚蕩す(六)。

魏氏亡書を采掇し、三閣に蔵す。秘書郎鄭默、始めて中經簿を制し、秘書荀勗、經史子集を分けて甲乙丙丁の目に為り、大凡九千九百四十五卷。惠懷の末、才遺有る靡し（七）。西晋の著作郎李充、勗の旧部を以て之を校べ、在る者は但だ三千一十四卷有るのみ（八）。其の後中朝遺書、稍や江左に流る。宋の元帝八年、秘書監謝靈運は四部目を造り、凡そ四千五百八十二卷（九）。元徽の初め、秘書丞王儉又た目錄を造り、万五千七十四卷。儉又た別に七志を撰す。經典志・諸子志・文翰志・軍書志・陰陽志・術芸志・凶譜志有り（一〇）。齊の永明中、秘書丞王亮又た書目を造り、万八千一十卷（一一）。齊末の兵火、秘閣を延焼す（一二）。梁の初め、秘書監任昉に命じて文德殿内に于いて衆書を集藏せしむ。二万三千一百六卷（一三）。普通中（五二〇～五二七）、阮孝緒は更に七録を為り、典録・記伝録・子録・文集録・伎術録・仏録・道録有り（一四）。元帝侯景を克平し、文德殿の書及び公私の經籍を収め江陵に帰す、大凡十万余卷。周師郢に入り、並びに自ら之を焚く（一五）。

宋武関に入り、其の図籍を収むるに纔かに四千卷。赤字赤紙、其の字古拙なり（一六）。魏の孝文始めて洛邑に都し、書を齊に借り、秘府稍く充実す（一七）。爾朱の乱、散落復た多し（一八）。北齊鄴に遷り、頗る更た搜聚す（一九）。後周目を定むるに、書は止だ八千のみ、其の後増へて万卷に至る。周武齊を平ぐるや、先ず書府を封じ、加へる所の旧字は僅かに五千に至る（二〇）。

隋の開皇三年（五八三）、秘書監牛宏は表もて分遣して異本を搜訪せしめんことを請う。書一卷毎に、縑一疋を賞し、校写既に定むれば、本其の主に戻す。是れに由り人間の異書往往にして間出す（二一）。陳を平ぐる後に及んで、經籍漸く多し（二二）。煬帝は限りて五十の副本を写し、分けて三品と為す。東都の觀文殿の東西の廊屋に於いて列ねて以て之を貯う（二三）。大唐武德五年（六二二）隋の鄭公を克平し、尽く圖書を収め、司農少卿宋遵貴に命じて之を載するに船を以てし、河を汭り西上し、底柱を行き經るに、多く湮没せられ、十に一二を存す。其の目錄四部書、大凡八万六千九百六十六卷、凶書を除き、及び淺俗、教理を益すること無き者を刪去するに、見在三万六千七百八卷、著して隋書經籍志に在り。自後の卷秩は頗る増す（二四）。開元中（七二三～七四一）、四部目錄を定め、大凡五万八百五十卷（二五）。此れ漢自り以来の、典籍の大数なり。

## 【註釈】

(一) 漢は秦の学を滅ぼすを承け 「秦の学を滅ぼす」とは、秦の始皇帝による「焚書」「坑儒」のこと。焚書のいきさつについては、『史記』卷六・始皇本紀三十四年条、坑儒は同書三十五年条をそれぞれ参照。隋の牛弘は「献書の路を開くを請うの表」の中で、

及秦皇馭宇、吞滅諸侯、任用威力、事不師古、始下焚書之令、行偶語之刑。先王墳籍、掃地皆尽。本既先亡、從而顛覆。臣以図讖言之、經典盛衰、信有徵数。此則書之一厄也。〔『隋書』卷四九・牛弘伝〕

と述べ、始皇帝による焚書を書の災厄の第一に挙げている。

(二) 武帝は献書の路を開き、……内に延閣・広内・秘室の府有り 武帝は、前漢第七代武帝劉徹（在位前一四一～前八七年）のこと。武帝による蔵書収集については、『芸文類聚』卷一二・帝王部二・漢武帝所引の劉歆『七略』に、

孝武皇帝、勅丞相公孫弘、広開献書之路、百年之間、書積如丘山。故外則有太常・太史・博士之蔵、内則有延閣・広内・秘室之府。とあり、また、『漢書』卷二九・芸文志（以後『漢志』と略称）に、

漢興、改秦之敗、大收篇籍、広開献書之路、迄孝武世、書缺簡脱、礼壞樂崩、聖上喟然而称曰、「朕甚閔焉」。於是建蔵書之策、置写書之官、下及諸子伝説、皆充秘府。

とあるように、武帝は公孫弘に命じて民間より広く献書をつのり、専門の官を設けてそれらを書き写させ、その結果、宮中の図書館には大量の書籍が収蔵されることとなったという。

(三) 成帝の時、秘蔵頗る亡散有り、……大凡万三千二百六十九卷 成帝は前漢の第一一代成帝劉駑（在位前三三～前七年）のこと。

哀帝は前漢第一二代哀帝劉欣（在位前七～前一年）のこと。『漢志』によれば、

至成帝時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺書於天下。詔光祿大夫劉向校経伝諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校数術、侍医李柱国校方技。每一書已、向輒条其篇目、撮其指意、録而奏之。会向卒、哀帝復使向子侍中奉車都尉歆卒父業。歆於是総群書而奏其七略、故有輯略、有六芸略、有諸子略、有詩賦略、有兵書略、有術数略、有方技略。今刪其要、以備篇籍。……大凡書、六略三十八種、五百九十六家、万三千二百六十九卷。

とある。『漢書』卷一〇・成帝本紀によれば、成帝が陳農に書籍の蒐集を命じたのは河平三年（前二六）秋八月のことである。この時の書籍蒐集はたんなる蔵書の欠を補うだけでなく、集められた書物を全面的に校訂するものであった。また、本文には「哀帝は向の子歆をして父の業を嗣がしめ」とあるが、前掲した『漢志』にあるように、劉向は集められた書物を校訂しただけでなく、さらに一書ごとにその解題を作成し、分類して、それまでの学術を総括したのである。哀帝の建平元年（前六）に劉向が亡くなると、子の劉歆がこれを受け継ぎ完成させた。こうして、中国史上はじめての図書目録である劉向の『別録』と劉歆の『七略』が作られたのである。両書とも散逸してしまったが、『七略』は大体が『漢志』の基礎として伝わっている。

劉向は、本名は更生、成帝の即位後に向と改名。字は子政、沛の人。漢の高祖劉邦の弟楚元王交の子孫。『列女伝』・『説苑』・『新序』等の著作がある。『漢書』卷三六に列伝がある。劉歆は、字は子駿。父の劉向とともに典籍の整理にあたり、『七略』を完成した。

（四）王莽の末、又た焚焼せらる　王莽（前四五～後二三年）、字は巨君、前漢の元帝の皇后王政君の甥。前八年に新王朝を建国したが、周代を理想とする復古的な政策から豪族の離反を招き、さらに一八年に赤眉の乱が起り、二三年、混乱の中に殺害され、新は一代限りで滅亡した。

（五）光武洛陽に遷り、所載の……爾後の撰録、前より三倍す　「光武」は、後漢の初代光武帝劉秀（在位二五～五七年）のこと。明帝は第二代明帝劉莊（在位五七～七五年）のこと。本文は、『後漢書』列伝六九・儒林伝序（以下、『後漢書』儒林伝と略称）にある次の文をもとにしていると思われる。

初、光武遷還洛陽、其經牒秘書載之二千余両、自此以後、參倍於前。

前漢末に一三二六九卷あった宮中の蔵書は、光武帝が後漢を建国し、都を洛陽に移した時には、具体的な数は分からないものの、車に千両余りまで減ってしまったが、その後、以前の三倍の量となったという。どのようにして書籍が増えたのかについては、前に引用した牛弘の上表文には、

光武嗣興、尤重經誥、未及下車、先求文雅。於是鴻生鉅儒、繼踵而集、懷經負帙、不遠斯至。肅宗親臨講肄、和帝數幸書林、其蘭台・石室・鴻都・東觀、秘牒填委、更倍於前。

とあり、光武帝から第四代和帝までに蘭台・石室・鴻都・東觀は藏書で埋まっていき、その結果が本文の「前より三倍す」なのである。しかし、本文では「明帝尤も儒術を重んじ、爾後の撰録、前より三倍す」とする。この明帝が儒学を重んじたというのは、『後漢書』儒林伝序に次のような記載がある。

中元元年（五六）、初建三雍。明帝即位、親行其礼。天子始冠通天、衣日月、備法物之駕、盛清道之儀、坐明堂而朝群后、登靈台以望雲物、袒割辟雍之上、尊養三老五更。饗射礼畢、帝正坐自講、諸儒執經問難於前、冠帶縉紳之人、圜橋門而觀聽者、蓋億万計。其後復為功臣子孫・四姓末属別立校舍、搜選高能以受其業、自期門羽林之士、悉令通孝經章句、匈奴亦遣子入学。濟濟乎、洋洋乎、盛於永平矣。

さらに、「爾後の撰録」については、『隋書』卷三十一・經籍志（以下、『隋志』と略称）の総序に、

光武中興、篤好文雅、明・章繼軌、尤重經術。四方鴻生鉅儒、負表自遠而至者、不可勝算。石室・蘭台、弥以充積。又於東觀及仁寿閣集新書、校書郎班固・傅毅等典掌焉。並依七略而為書部、固又編之、以為漢書芸文志。

とあり、班固らが編纂した『書部』とこれをもとにして編纂した『漢志』を指していると考えられる。

#### （六）董卓の都を移すの際、……長安の乱、一時に焚蕩す 『後漢書』儒林伝序に、

及董卓移都之際、吏民擾乱、自辟雍・東觀・蘭台・石室・宣明・鴻都諸藏典策文章、競共剖散、其縑帛圖書、大則連為帷蓋、小乃制為膝囊。及王允所収而西者、裁七十余乘、道路艱遠、復弃其半矣。後長安之乱、一時焚蕩、莫不泯尽焉。

とあり、本文はこれにもとづく。また、『後漢書』列伝五十六・王允伝にも、

初平元年（一九〇）、代楊彪為司徒、守尚書令如故。及董卓遷都関中、允悉収斂蘭台・石室圖書秘緯要者以従。既至長安、皆分別条上。又集漢朝旧事所当施用者、一皆奏之。経籍具存、允有力焉。

とある。董卓（？～一九二年）、字は仲穎、隴西臨洮の人。後漢末、外戚の何進と宦官が対立していたが、一八九四年四月に靈帝が亡くなると、何進は宦官誅滅を計画し、并州牧だった董卓らに都に集まるよう要請した。まもなく何進は宦官に殺され、宦官も袁紹によって殺害された。その直後に洛陽入りした董卓は強力な軍隊で朝廷を制圧し、少帝を廃位させ、その弟の献帝を擁立した。反董卓軍の勢いが強く



なってくると、洛陽を焼き払い、長安に都を遷した。一九二年に部下の呂布に殺害された。『三国志』魏書六と『後漢書』列伝六二に列伝がある。王允（一三七―一九二）字は子師、太原の人。長安遷都後の董卓は政務をほとんど王允にまかせきりであったが、王允は呂布らと董卓を殺害した。『後漢書』列伝五六に列伝がある。

（七）魏氏亡書を採擷し、三閣に……恵懷の末、子遺有る靡し 本文の「三閣」は後に引用する『隋志』総序などの「秘書・中・外

の三閣」。「中」は中書をいい、「外」は蘭台をいう。『三国志』魏書一三・王肅伝所引の『魏略』に「薛夏、字は宣声、天水人なり。：

（薛）夏之に報えて曰く、蘭台を外台と為し、秘書を内閣と為し、台、閣は、一なり、…とある。「渠閣」は石渠閣のこと。「恵懷の末」は西晋の恵帝と懐帝の時に起こった八王の乱と永嘉の乱をさす。「靡有子遺」は、『詩経』大雅・雲漢に、「周余黎民、靡有子遺」とある。

鄭默（二二三―二八〇）は、字は思元、滎陽開封の人。魏の秘書郎から西晋の光祿勳に至った。『晋書』卷四四に列伝がある。鄭默の『魏中経簿』の編纂時期については、『初学記』卷二一・秘書郎に引く王隱『晋書』に、

鄭默、字思元、為秘書郎、刪省旧文、除其浮穢、著魏中経簿。中書令虞松謂默曰、而今而後、朱紫別矣。

とあり、前の「七録序」とほぼ同様の内容の載せるが、彼の『中経簿』を評した「中書令虞松」という人物から推測できる。虞松については、『三国志』魏書二八・鍾会伝の「正始中、以為秘書郎、遷尚書中書侍郎。」に引く『世説新語』に

司馬景王命中書令虞松作表、再呈輒不可意、命松更定。以経時、松思竭不能改、心苦之、形於顔色。会察其有憂、：

とあり、虞松が正始年間（二四〇―二四八）に中書令に就任していたことが分かる。また、同書魏書四・甘露元年正月条の注に引く『魏氏春秋』にも「中書令虞松」が見える。

二月丙辰、帝宴群臣於太極東堂、與侍中荀顗、尚書崔賛、袁亮、鍾毓、給事中中書令虞松等並講述礼典、遂言帝王優劣之差。

ただ、『晋書』卷四四・鄭默伝によれば、鄭默は『魏中経簿』編纂後に尚書考功郎に転じ、蜀討伐に従事したとあるので、下限は魏の蜀討伐が本格化する前である。したがって、『魏中経簿』の編纂は魏の斉王芳の正始年間から嘉平年間（二四九―二五三）の間であろう。

荀勗（？―二八九）は、字は公曾、潁川潁陰の人。『晋書』卷三九に列伝がある。先ほどの『隋志』総序や「七録序」の他に、『文選』卷四六・任昉「王文憲集序」の注に引く王隱『晋書』に、

荀勗、字公曾。領秘書監、與中書令張華、依劉向「別錄」整理錯亂。又得汲冢竹書、身自撰次、以為中經。

とあり、また『初學記』卷一二・秘書監に引く傳暢『晉諸公讚』にも、

荀勗、領秘書監。太康二年（二八二）汲冢中得竹書、勗躬自撰次注寫、以為中經、列於秘書。經伝欠文、多於証明。

とあるように、荀勗は中書令の張華と共に宮中の藏書整理をし、『魏中經簿』によって図書目録である『晉中經簿』を編纂した。さらに、発見の年次は諸説あるが、太康二年から汲冢書の整理をはじめ、それを『晉中經簿』の丁部に収録した。

四部分類の成立に関わる内容である本文は、『隋志』総序の次の文をもとにしている。

魏氏代漢、采掇亡書、藏在秘書・中・外三閣。魏秘書郎鄭默始制中經、秘書監荀勗、又因中經、更著新簿、分為四部、總括群書。一曰甲部、紀六芸及小学等書。二曰乙部、有古諸子家・近世子家・兵書・兵家・術數。三曰丙部、有史記・旧事・皇覽簿・雜事。四曰丁部、有詩賦・図讚・汲冢書。大凡四部合二万九千九百四十五卷。但録題及言、盛以縹囊、書用細素。至於作者之意、無所論辯。惠懷之末、京華蕩覆、渠閣文籍、靡有孑遺。

また、梁の阮孝緒が著した『七録』序（『弘明集』卷三に所収、以下、「七録序」と略称）には、

魏晉之世、文籍遽広、皆藏在秘書・中・外三閣。魏秘書郎鄭默刪定旧文、時之論者謂為朱紫有別。晉秘書監荀勗、因魏中經更著新簿、雖分為十有余卷、而總以四部別之。惠懷之乱其書略尽。

とある。

四部分類の成立について、鄭默『魏中經簿』の内容が分からないものの、内藤湖南氏は荀勗『晉中經簿』が「魏の中經に因」ったというのを分類法まで含めてのことと解釈し、四部分類法は魏の時代に台頭したとする（内藤湖南「支那目錄学」『内藤湖南全集』第一二巻、筑摩書房、一九七〇年）。一方、余嘉錫氏は、「七録序」、「隋志」ともに体例に変更があったことを言わないことから、その分類は『七略』に沿ったものとし、四部分類は荀勗の「晉中經簿」から始まるとし（余嘉錫『目錄学發微』中華書局、一九六三年）、こちらが通説となっている。しかし、井上進氏は、『晋起居注』や王隱『晋書』などの文籍から、太康年間に晋の武帝により宮中藏書の整理が決定されると、まずそれを四部に分類すること、各部の責任者として郎中一人を派遣するという方針がまず示され、それから荀



昴らによる実際の整理が始まったとし、このように発足当初から四部分類の方針が定まったのは、すでに鄭默による四部分類という前例があったからではないかとする（井上進「四部分類の成立」『名古屋大学文学部研究論集』史学四五、一九九九年、のちに同氏著『書林の眺望―伝統中国の書物世界―』平凡社、二〇〇六年に所収）。

（八）西晋の著作郎李充、昴の旧部を……但だ三千一十四卷有るのみ 李充、字は弘度、江夏の人。『晋書』卷九二・文苑伝に伝がある。『隋志』総序に、

東晋之初、漸更鳩聚。著作郎李充、以昴旧簿校之、其見存者、但有三千一十四卷。

とあるように、本文の「西晋」は東晋の誤りである。李充の編纂した目録は、「七録序」の「古今書最」に「晋元帝書目、四部三百五帙、三千一十四卷」とあるのがそれである。東晋の元帝司馬睿の在位期間は三一七―三二二年。また、『文選』卷四六・任昉「王文憲集序」の李善注に、

臧荣绪『晋書』曰、「李充、字弘度。為著作郎。于時典籍混乱、删除頗重、以類相從、分為四部、甚有條貫、秘閣以為永制。」五經為甲部、史記為乙部、諸子為丙部、詩賦為丁部。

とあり、この李充の目録で史書を乙部、諸子の書を丙部とし、経・史・子・集という四部分類の順番が定まったのである。

（九）其の後中朝遺書、稍や江左……凡そ四千五百八十二卷 『隋志』総序に、

其後中朝遺書、稍流江左。宋元嘉八年（四三一）、秘書監謝靈運造四部目録、大凡六万四千五百八十二卷。

とあり、ここでも『隋志』をもとにしている。したがって、本文中の「宋元帝八年」は「宋元嘉八年」に、「造四部目録」に改めるべきであろう。元嘉は宋の文帝劉義隆の年号で、四二四―四五三年。ただ、『隋志』では、この目録に収録した書籍の総数を六万四千五百八十二卷とするが、「七録序」古今書最には「宋元嘉八年秘閣目録、一千五百六十四帙、一万四千五百八十二卷」となっていて、『隋志』の記述と異なっている。ところが、本文はさらに少なく「凡そ四千五百八十二卷」となっている。これは『旧唐書』経籍志（以下『旧唐志』と略称）後序にある「宋謝靈運は四部書目録を造る、凡そ四千五百八十二卷」と一致する。謝靈運（三八五―四三三）は、陳郡陽夏の人。淝水の戦いで功績を立てた謝玄の孫。魏晉南北朝時代を代表する詩人で、山水詩の祖とされる。宋の文帝

が即位すると秘書監や侍中などを歴任したが、職を辞して帰郷。のちに反逆罪に問われて処刑された。『宋書』卷六七・『南史』卷一九に伝がある。

(一〇) 元徽の初、秘書丞王儉……陰陽志、術芸志、図譜志有り      ここもやはり『隋志』総序の記述がもとになっているが、『隋志』には

元徽元年(四七三)、秘書丞王儉又造目錄、大凡一万五千七百四卷。儉又別撰七志。一曰經典志、紀六芸・小学・史記・雜伝。二曰諸子志、紀今古諸子。三曰文翰志、紀詩賦。四曰軍書志、紀兵書。五曰陰陽志、紀陰陽圖緯。六曰術芸志、紀方技。七曰図譜志、紀地域及圖書。其道・仏付見、合九条。然亦不述作者之意、但於書名之下、每立一伝、而又作九篇條例、編乎首卷之中。文義淺近、未為典則。

とあるように、『七志』の分類について具体的な記述があり、さらに仏教や道教も付載されて、合わせて九篇としている。ただ、本文では王儉の目錄の卷数を「万五千七十四卷」とし、『隋志』と異なっているが、「七録序」古今書最では本文と同じく「宋元徽元年秘閣四部書目錄二千二十帙一万五千七十四卷」となっている。王儉(四五二～四八九)、字は仲宝、琅邪臨沂の人。『南齊書』卷二三と『南史』卷二二に列伝がある。

(一一) 齊の永明中、秘書丞王亮又た書目を造る、万八千一十卷      『隋志』総序に、

齊永明中、秘書丞王亮・監謝朓、又造四部書目、大凡一万八千一十卷。

とあるように、永明年間の目錄作成では王亮と秘書監の謝朓によつて編纂された。この目錄は、阮孝緒の「七録序」の古今書最に、齊永明元年(四八三)、秘閣四部目錄五千新足、合二千三百三十二帙一万八千一十卷。

とあり、永明元年に作成されたことが分かる。また、『隋志』と「七録序」から、この時の目錄の名前が「四部目錄」であることも判明する。王亮(?～五一〇)、字は奉叔、琅邪臨沂の人、『梁書』卷一六と『南史』卷二三に列伝あり。謝朓(四四一～五〇六)、字は敬沖、陳郡陽夏の人、『梁書』卷一五と『南史』卷二〇に列伝がある。興膳宏・川合康三両氏は、王亮・謝朓がそれぞれ秘書丞と秘書監に任ぜられたのは宋末であったことから、彼らの撰した書目も実質的には宋末の秘閣の目錄だったと推定する。興膳宏・川合康三著『隋書経

籍志詳攷』（汲古書院、一九九五年）を参照。

（一二）齊末兵火、秘閣を延焼す 南齊の皇帝の東昏侯蕭宝卷（廢帝、在位四九八～五〇二）は、父の明帝が後事を託した重臣をはじめ、

高官を次々に殺すなど暴虐の限りをつくし、これに対して、五〇〇年に雍州刺史の蕭衍が襄陽で挙兵し、荊州刺史であった南康王蕭宝融を擁立して都の建康に進軍、翌年に東昏侯は臣下に殺され、建康も陥落した。兵火が秘閣にまで及んだのはこの時であろう。

（一三）梁の初め、秘書監任昉に……二万三千一百六卷 梁初における書籍の整理と目録については、「七録序」は、

有梁之初、欠亡甚衆。爰命秘書監任昉、躬加部集。又於文德殿内別藏衆書、華林園中總集積典。大凡二万三千一百六卷、而積氏不豫焉。梁有秘書監任昉、使奉朝請祖暉撰其名録。其尚書閣内別藏經史雜書。華林園又集積氏經論。自江左篇章之盛。未有踰於当今者也。

とし、『隋志』総序にも、

梁初、秘書監任昉、躬加部集。又於文德殿内別藏衆書、華林園中總集積典。大凡二万三千一百六卷、而積氏不豫焉。梁有秘書監任昉・殷鈞四部目録、又文德殿目録。其術數之書、更為一部、使奉朝請祖暉撰其名。故梁有五部目録。

とあり、両書の記述を整理すると、①任昉と殷鈞が編纂した秘閣の蔵書目録である『四部目録』と②劉孝標による『文德殿目録』、③祖暉による文德殿の天文などに関する術数書の目録、④尚書閣に集められた経書と史書の雑書の目録、⑤華林園に集めた仏教書の目録、合計五部の目録が編纂されたことになる。本文では任昉一人の名前しか挙がっていないが、文德殿内の蔵書目録編纂には、あと殷鈞と劉孝標も関わっていたことが分かる。また、「七録序」の古今書最には、

梁天監四年（五〇五）文德正御四部及術数書目録、合二千九百六十八帙、二万三千一百六卷

とあるように、②の『文德殿目録』と③の術数書の目録を著録し、その原注に「秘書丞殷鈞は秘閣の四部書を撰するも、文德の書より少なし。故に其の数を録さざるなり」と記すように、その収蔵書数「二万三千一百六卷」とは文德殿のみの蔵書数であるが、その数は本文や『隋書』経籍志序が記す数と一致している。任昉（四六〇～五〇八）、字は彦昇、樂安博昌の人。任昉は蔵書家としても名高く、彼の死後は武帝の命により、彼の蔵書が宮中の蔵書の不足を補うのに使われたという。『梁書』卷一四・『南史』五九に列伝がある。

（一四）普通中、阮孝緒更に七録……伎術録、仏録、道録有り 普通は梁の武帝期の年号で、五二〇～五二七年。『隋志』総序には、

普通中、有処士阮孝緒、沈靜寡欲、篤好墳史、博采宋・齊已來、王公之家凡有書記、參校官簿、更為七錄。一曰經典錄、紀六芸。二曰記伝錄、紀史伝。三曰子兵錄、紀子書・兵書。四曰文集錄、紀詩賦。五曰技術錄、紀數術。六曰仙錄。七曰道錄。其分部題目、頗有次序、割析辭辭義、淺薄不經。

とある。阮孝緒（四七九～五三六）、字は士宗、陳留尉氏の人。『梁書』卷五一・隱逸伝と『南史』卷七二・隱逸伝に伝がある。

（一五）元帝侯景を克平し、文徳……並びに自ら之を焚く この部分は『隋志』総序をもとにして書かれている。

元帝克平侯景、收文徳之書及公私經籍、歸于江陵、大凡七万余卷。周師入郢、並自焚之。

ただ、本文は蒐集した書籍数を「十万余卷」とし、『隋志』と合致しない。この巻数はおそらく次に挙げる顔之推「観我生賦」の自注によつたものと思われる。

元帝は、梁の第三代皇帝元帝蕭繹（在位五五二～五五四年）のこと。「侯景」とは、武帝の太清二年（五四八）に東魏より投降し南予州刺史となつていた侯景がおこした反乱「侯景の乱」のこと。反乱軍は太清三年（五四九）三月に都の建康を陥落させ、武帝を台城に幽閉し、武帝は五月に失意のうちに憤死した。侯景は天正元年（五五二）十月に皇帝に即位して国号を漢としたが、太始二年（五五二年）三月、江陵で即位していた元帝が派遣した王僧弁及び陳霸先の攻撃を受けて敗死した。

また、元帝の焚書のいきさつについて最も早い史料は、顔之推「観我生賦」（『北齊書』卷四五・文苑伝所引）であり、民百万而囚虜、書千両而煙燭、溥天之下、斯文尽喪。

とあり、その自注には、

北於墳籍、少於江東三分之一、梁氏剽乱、散逸湮亡。唯孝元鳩合、通重十万余、史籍以来、未之有也。兵敗悉焚之、海内無復書府とある。北周の軍隊が江陵を攻撃したのは、承聖三年（五五四）十一月である。

（一六）宋武関に入り、其の図籍を……赤字赤紙、其の字古拙なり ここも『隋志』総序をもとにして書かれている。

宋武入関、收其図籍、府蔵所有、纔四千卷。赤軸青紙、文字古拙。

宋武とは、南朝宋の初代皇帝武帝劉裕（在位四二〇～四二二）である。関中に攻め込んだのは、劉裕がまだ皇帝になる前のことで、東

晋の義熙十三年（四一七）に北伐して長安を陥し、後秦を滅ぼしたことを指す。本文中の「赤字赤紙」は「赤軸青紙」の誤りであろう。

（二七）魏の孝文始めて洛邑に都し、書を齊に借り、秘府稍く充実す この文章も、『隋書』卷三二・経籍志序に、

魏孝文徙都洛邑、借書於齊、秘府之中、稍以充実。

とあるのを下敷きになっている。魏の孝文とは、北魏第六代孝文帝拓跋宏（在位四七一～四九九年）である。孝文帝は四九〇年よりようやく親政を開始すると、いわゆる漢化政策を推進し、太和一七年（四九三）に平城から洛陽への遷都が強行されたのもその一環であった。齊は南齊のこと。ところで、吉川忠夫氏は、『南齊書』王融伝などをもとに、孝文帝が南齊に使節を派遣して借書を求めたのは、洛陽遷都前の太和一三年（南齊の年号では永明七年、四八九）のことであり、結局借書は実現にいたらなかったことを明らかにし、『隋志』総序の記述を誤りとする。吉川忠夫「北魏孝文帝借書攷」（『東方学』九六、一九九八年）を参照。

（二八）爾朱の乱、散落復た多し 北鎮の乱に始まる北魏末の動乱の最中、都の洛陽では胡太后派と孝明帝派の対立が激化しており、

五二八年、孝明帝派は稽胡族の爾朱榮に援助を要請し、胡太后派を抑えようとした。しかし、爾朱榮が洛陽に到着する前に、胡太后派は孝明帝を毒殺した。爾朱榮は孝莊帝を擁立し、洛陽に進駐して胡太后とその一派を捕らえ、彼らを黄河に投げ込んだ。さらに、皇族や官僚ら二千人以上を河陰で虐殺した。これをきっかけに各地で爾朱氏への反抗が広がり、太昌元年（五三二）の高歓らによる爾朱氏の軍殲滅まで続いた。

（二九）北齊鄴に遷り、頗る更た搜聚す 『隋志』総序に、

後齊遷鄴、頗更搜聚、迄於天統・武平、校写不輟。

とある。天統・武平はいずれも北齊の後主高緯（在位五六五～五七七年）の年号である。『北齊書』卷四五・文苑伝樊遜伝によれば、

（天保）七年、詔令校定群書、供皇太子。遜與冀州秀才高乾和・瀛州秀才馬敬德・許散愁・韓同宝・洛州秀才傅懷德・懷州秀才古道子・

広平郡孝廉李漢子・渤海郡孝廉鮑長暄・陽平郡孝廉景孫・前梁州府主簿王九元・前開府水曹參軍周子深等十一人同被尚書召共刊定。時秘府書籍紕繆者多、遜乃議曰、「按漢中興校尉劉向受詔校書、每一書竟、表上、輒言、臣向書、長水校尉臣參書、太史公・太常博士書、中外書合若干本以相比校、然後殺青。今所讎校、供擬極重、出自蘭台、御諸甲館。向之故事、見存府閣、即欲刊定、必藉

衆本。太常卿邢子才・太子少傅魏収・吏部尚書辛術・司農少卿穆子容・前黃門郎司馬子瑞・故国子祭酒李業興並是多書之家、請牒借本參校得失。」秘書監尉瑾移尚書都坐、凡得別本三千余卷、五經諸史、殆無遺欠。

とあり、文宣帝高洋の天保七年（五五六）に詔によって書籍を校定して皇太子に献上させ、樊遜ら十二人が刊定にあたった。樊遜は宮中の書庫の書籍に誤りの多いことを指摘し、邢子才や魏収・辛術ら蔵書家の書を借りて校定するよう要請した。秘書監の尉瑾が尚書都坐にこれを送り、別本、合計三〇〇〇余卷を得た。こうして五経や諸史の書に遺漏するものがほとんどなくなったという。『隋志』のいう天統・武平年間まで校定を続けたというのは、この時の校定事業が続いていたのであろう。また、尾崎康氏は天保七年の校書事業に参加した十二人のうち、のちに修文殿御覽の編纂した文林館待詔となった古道子と周子深がいることを指摘し、北斉での校書事業が御覽編纂の基礎となったと指摘する。文林館は、後主の武平四年（五七三）二月、漢人官僚の祖珽が中心となって設立し、八次にわたって六十余人の文学の士を集めて文林館待詔とし、修文殿御覽の編纂を行わせた。その設立および御覽編纂のいきさつなどについては、『北斉書』巻四五と『北史』巻八三の文苑伝序に詳しい。また、文林館をめぐる諸問題については、尾崎康氏「北斉の文林館と修文殿御覽」、『史学』四十・二・三、一九六七年）を参照。

（二〇）後周目を定むるに、書は……旧字は僅かに五千に至る 『隋志』総序に、

後周始基関右、外逼強隣、戎馬生郊、日不暇給。保定之始、書止八千、後稍加増、方盈万卷。周武平斉、先封書府、所加旧本、纔至五千。

とある。後周は北周（五五一～五八二）のこと。保定は北周武帝の年号で、五六一～五六五年。北周の武帝が北斉を滅ぼして華北を統一したのは建徳六年（五七七）である。『隋志』では、北周は周りの国々との戦いが続き、保定の初めには書籍はわずか八〇〇〇とあるが、『北史』巻九・周本紀明帝紀に、

帝寛明仁厚、敦睦九族、有君人之量。幼而好学、博覽群書。善属文、詞彩温麗。及即位、集公卿已下有文学者八十余人、於麟趾殿刊校經史。

とあり、同書卷六四・章孝寛伝に、



明帝初、参麟趾殿学士、考校図籍。

とあるように、明帝は即位後に文学ある者八十人余りを麟趾殿に集めて麟趾殿学士とし、経書や史書の調査をさせている。

（二二）隋の開皇三年、秘書監……異書往往にして間出す 『隋志』総序に、

隋開皇三年、秘書監牛弘、表請分遣使人、搜訪異本。每書一卷、賞絹一疋、校写既定、本即帰主。於是民間異書、往往間出。

とある。本文では「牛弘」が「牛宏」になっているが、これは「弘」が清の乾隆帝の諱にあたり、「宏」で代用させたためである、また、「民間」が「人間」となっているのも同様に、「民」が唐の太宗の諱にあたり、「人」で代用させたためである。牛弘（五四五～六一〇）、字は里仁、安定鶉觚の人。隋初の礼学律暦の制定に関わった。『隋書』卷四九と『北史』卷七二に伝あり。この時に出された牛弘の上表とは、前掲注（二）と（五）でも引用した「献書の路を開くを請うの表」である。

（二三）陳を平ぐる後に及んで、経籍漸く多し 隋が陳を滅ぼして中国を統一したのが開皇九年（五八九）である。『資治通鑑』卷一七七・隋紀一・文帝開皇九年正月条に、

丙戌、晋王広入建康、…使高頼興、元師府記室裴矩収図籍、封府庫、資財一無所取、天下皆称広、以為賢。

とあり、建康を陥落させるとすぐに、陳の蔵書を没収した。

（二四）煬帝は五十副本を写す……列ねて以て之を貯う 煬帝は隋の第二代煬帝楊広（在位六〇四～六一三年）のこと。『隋志』総序に、

煬帝即位、秘閣之書、限写五十副本、分為三品。上品紅瑠璃軸、中品紺瑠璃軸、下品漆軸。於東都觀文殿東西廂講屋以貯之、東屋

蔵甲乙、西屋蔵丙丁。

とあり、『隋志』史部簿録類に「隋大業正御書目錄 九卷」が著録されている。

（二五）大唐武德五年隋の鄭公を……自後の巻秩は頗る増す 『隋志』総序に、

大唐武德五年、克平偽鄭、尽收其図書及古跡焉。命司農少卿宋遵貴載之以船、沂河西上、将致京師。行経底柱、多被漂没、其所存者、十不一二。其目錄亦為所漸濡、時有殘欠。今考見存、分為四部、合条一万四千四百六十六部、有八萬九千六百六十六卷。其目錄所取、文義淺俗、無益教理者、並刪去之。其旧録所遺、辞義可采、有所弘益者、咸付入之。遠覽馬史・班書、近觀王・阮志録、挹其

風流体制、削其浮雜鄙俚、離其疎遠、合其近密、約文緒義、凡五十五篇、各列本条之下、以備經籍志。

とある。本文の「見在三万六千七百八卷」は、『隋志』後序にある「凡四部経伝三千一百二十七部、三万六千七百八卷。」と合致する。隋の鄭公とは隋末の群雄の一人である王世充（？～六二二）のこと。六一八年に煬帝が殺害されると、洛陽で越王侗を皇帝に擁立し、その功により鄭国公となった。六一九年には自ら皇帝に即位し、国号を鄭とし、河南北部を支配した。六二〇年、唐が王世充に対する総攻撃を開始すると、王世充は河北の竇建徳に救援を依頼したが、翌年、竇建徳は降伏し、王世充も洛陽で降伏した。

(二五) 開元中、四部目録を定め、大凡五万八百五十卷 この「四部目録」とは、おそらく母<sup>ふ</sup>嬰の『古今書録』四十卷を指しているものと思われる。玄宗は開元三年（七一五）に馬懷素と褚无量に命じて宮中書庫の旧藏書を整理させた。馬懷素は王儉『七志』の続編の編纂を願ひ出てその作業に従事したが、馬懷素が亡くなったため、この書は完成しなかった。秘書官に命じて四部の書の校定原稿を作らせたが、完成せず、ついに開元七年（七一九）に元行沖に命じて馬懷素らの代わりをさせ、『群書四録』二百卷が完成し、開元九年（七二二）に奏上した。しかし、『旧唐志』総序に引く母嬰『古今書録』の序文によれば、この編纂作業に加わっていた母嬰はこの『群書四録』には不満な点があり、みずから『古今書録』四十卷を編纂した。『旧唐志』総序には、『古今書録』に著録されたのは「五一八五二卷」とし、本文の「五万八百五十卷」とは異同がある。

### 【現代語訳】

漢は秦による「焚書坑儒という」学問弾圧の後を承け、武帝は民間より広く献書をつのり、それらを書き写させる専門の官を設置した。外廷には太常・太史・博士の書庫があり、宮廷内には延閣・広内・秘室の書庫があった。成帝の時に、秘藏していた書物がかなり散佚してしまったので、謁者の陳農に命じて、逸書を天下に探し求めさせた。光禄大夫の劉向に命じて経伝・諸子・詩賦を校訂させ、歩兵校尉の任宏には兵書を校訂させ、太史令の尹咸には数術の書を校訂させ、侍医監の李柱国には医学や薬学などの方伎書を校訂させた。〔劉向が亡くなると〕哀帝は劉向の子の劉歆に命じてその仕事を引き継がせた。かくて、劉歆は群書を総まとめして『七略』を著わした。全部で一三二六九卷であった。王莽の末期に、書籍はまたも焼失した。後漢の光武帝は洛陽に遷都し、運ばせた経伝は二千両

余りであった。明帝は後漢の皇帝の中で最も儒学を重んじたので、その後の撰集では以前の三倍となった。董卓が都を遷した時に、辟雍・東觀・蘭台・石室・宣明・鴻藏の書庫にあった書籍や文書はいずれもばらばらになってしまい、圖書の絹は軍人が帷とばりや囊ふくろに使ってしまった。王允が収納して西の都長安に運んだ書物は、わずかに車七十台余りになった。長安までの道のりは遠く、またその半分を捨てた。だが、長安の大混乱で、すっかり焼けてしまった。

魏は散佚していた書籍を採集し、「秘書省・中閣・外閣の」三閣に収蔵した。秘書郎の鄭默が最初に『中経』を作り、秘書監の荀勗は書籍を経史子集に分けて甲乙丙丁の四部に分類し、合計すると九九四五卷であった。「西晋の」恵帝・懷帝の混乱期に、これらの書籍は何も残らなかった。東晋の著作郎の李充は荀勗の昔の目録によつて書籍を調べたところ、残っていたのはわずかに三〇一四卷だけであった。その後、西晋王朝の書物は少しずつ江南に流出していった。宋の元嘉八年、秘書監の謝靈運は『四部目録』を作り、全部で四五〇八二卷であった。元徽の初めには秘書丞の王儉も『目録』を作り、一五〇七四卷であった。王儉はまた別に『七志』を編纂した。その分類は、經典志・諸子志・文翰志・軍書志・陰陽志・術芸志・図譜志であった。齊の永明年間、秘書丞の王亮もまた『四部書目』を作り、全部で一八〇一〇卷であった。齊末に兵火が秘閣にまで及んだ。梁の初め、秘書監の任昉に命じて文德殿内に多くの書物を収蔵させ、全部で二三一〇六卷あった。普通年間、阮孝緒は新たに『七録』を作った。その分類は典録・記伝録・子録・文集録・伎術録・仏録・道録であった。元帝は侯景の乱を平定すると、文德殿の書籍や公私の蔵書を収集して江陵に持つて行ったが、その総数は十万巻以上あった。北周の軍隊が郢の都に攻め込むと、これらの書籍をすべて帝自ら焼いてしまった。

宋の武帝が関中に攻め入り、書籍を押収すると、わずか四千卷であった。赤い字（軸木の間違い）に赤い紙を用いており、その文字は古風で素朴であった。北魏の孝文帝が洛陽に遷都すると、南齊から書物を借りだし、秘府の書籍はしだいに充実していった。しかし、爾朱榮の乱が起ると、これらの書籍は民間に散佚してしまった。北齊は鄴に遷都すると、再び書籍を探し求めた。北周は書目を編纂したが、書籍はわずか八千、その後少しずつ増えていき、一万巻に達した。北周の武帝が北齊を平定すると、まず書府を封印したが、新たに手に入れた古書はわずかに五千ほどであった。

隋の開皇三年、秘書監の牛弘は上表し、使者を各地に派遣して異本を収集することを願い出た。書物一卷につき、絹一匹を褒賞とし、

校訂して筆写が終わると本はただちに持ち主に返された。その結果、民間にあった異本が次々と提供された。陳を平定した後、経籍はしだいに整っていった。煬帝は、五十部に限って筆写して副本を作り、それを三品に分けた。東都洛陽の観文殿の東西の廊屋に並べて〔書庫を作って〕これらを保管した。唐の武徳五年、隋の鄭公（王世充）を平定して、その図書と名跡をことごとく没収した、司農少卿の宋遵貴に命じてそれを船に載せ、〔都に運ぶため〕黄河を西にさかのぼり、底柱山にさしかかった時、多くが水中に沈んでしまい、残ったものは十の中の一二ほどであった。その目録の四部書目にあった八六九六六卷から、失われたものを除き、また卑俗で理の教化に無益なものすべて削ったところ、現存するものは三六七〇八卷あり、『隋書』経籍志に著録された。その後は書籍がしだいに充実していった。開元年間、『四部目録』を編纂し、全部で五〇八五〇卷であった。これが漢以来の書籍の総数である。

（高瀬 奈津子）

## 〔二〕『封氏聞見記』卷二・石經

## 【原文】

後漢明帝時、公卿言五經駁異、請開呂不韋冢、是未焚詩書前本。論者以爲古□□……（欠）……。神武作相、自洛陽運之於鄴。至河陽岸没水、其得至鄴者不盈其半。隋開皇六年、又自鄴載入長安。置於秘書內省、議欲補葺。隋亂、造立之司用爲柱礎。貞觀初、魏徵爲秘書監、始收聚之、十不存一。其相承傳拓之本、猶存秘府、而石經自此亡矣。天寶中、予在太學、與博士諸生共論經籍失正。爲欲建議請立大唐石經。遷延未發、而蕃寇海內、文儒道消。至今四十六年、兵革未息。嗚呼、石經之事、亦俟河之清也。

## 【訓読】

後漢明帝の時（一）、公卿五經の駁異を言い、呂不韋の冢を開き、未だ焚せざる詩書の前本を是たださんことを請う（二）。論者以爲おもらく古□□……（欠）……。神武相と作り、洛陽自り之を鄴に運ぶ（三）。河陽の岸に至りて水に没し、其の鄴に至るを得る者は其の半ばに盈たず（四）。隋の開皇六年、又た鄴自り載せて長安に入る（五）。秘書内省に置き、議して補葺せんと欲す（六）。隋の乱るや、造立の司は用て柱礎と爲す（七）。貞觀の初、魏徵秘書監と爲り（八）、始めて之を收聚し、十に一も存せず。其の相い承伝せる拓の本は、猶お秘府に存あり（九）、而れども石經は此れ自り亡うる。天寶中、予は太学に在り、博士諸生と共に経籍の失正を論ず（一〇）。爲に建議して大唐石經を立てるを請はんと欲す。遷延して未だ発せず、而るに蕃は海内を寇し、文儒の道は消ゆ（一一）。今に至るまで四十六年、兵革未だ息まず（一二）。嗚呼、石經の事も、亦た河の清を俟まちつなり（一三）。

## 【註釈】

- （一）後漢明帝の時 後漢（二五～二二〇）の明帝劉莊（在位五八～七五年）。  
 （二）公卿五經の駁異を言い、呂不韋の冢を開き、未だ焚せざる詩書の前本を是たださんことを請う 「五經」は易・書・詩・礼・春秋の

各経書をいう。「駁異」は異論を批正すること。呂不韋（？前二三五）は戦国末の大商人で、衛国濮陽（現在の河南省濮陽市）の人。のち秦の丞相となった。三千人の学者や論者を食客として養い、彼らが集めた先秦諸学派の学説をもとに『呂氏春秋』二十六編を編纂した。前二三七年に失脚して河南に蟄居させられていたが、二年後に四川へ遷されようとした際、毒を飲んで自殺した。呂不韋の墓については、南朝宋の裴駰『史記集解』に引く、『皇覽』（三国魏の劉劭・王象ら奉勅撰。黄初中に成書。已佚。清の黄奭『黄氏逸書考』に輯本がある）に「呂不韋冢在河南洛陽北邙道西大家是也。民伝言呂母冢。不韋妻先葬、故其冢名呂母也。」とある。現在、河南省偃師市蔡莊郷大塚頭村に「呂不韋墓」とされる冢墓があり、県級文物保護単位となっている。また一方で『魏書』卷一〇六中・地形志・鄭州陽翟郡条に「陽翟郡、領泉二。……陽翟（原注…二漢属潁川、晋属河南尹、興和元年属。有陽翟城・康城・禹山祠・赤沙澗・九山祠・呂不韋墓）」ともあり、陽翟は現在の河南省禹州市である。いずれが真の呂不韋墓であるのかは不詳。

後漢明帝の時に、諸儒が呂不韋の冢墓を啓こうとしたことについては、『太平御覽』卷五六〇・礼儀部・冢墓四に、『皇覽』冢墓記を引いて次のように記す。

又曰、文信君呂不韋冢、在河南洛陽城北邙山、道西大家是也。民伝言、呂母冢、不韋先墓。故其冢名呂母。不韋死、獲過於始皇矣。民伝云、不韋好経書、皆以葬。漢明帝朝、公卿大夫諸儒八十餘人、論五経誤失、符節令宋元上言、臣聞秦昭王與不韋好書、皆以書葬。王至尊、不韋久貴、冢皆以黄腸題湊、處地高燥、未壞。臣願発昭王・不韋冢、視未焼詩・書。

ここには当時、秦の昭王墓と呂不韋墓には、始皇帝の焚書以前の『詩経』や『書経』が納められていると考えられており、このためその墓を開けて旧書を掘りだすよう、符節令であった宋元という人物が代表となつて、明帝への上言が行われたことが述べられている。実際に墓が啓かれたかどうかは不明。

(三) 神武相と作り、洛陽自り之を鄴に運ぶ 「神武」は東魏（五三四～五五〇）の高歡（四九六～五四七）をさす。彼の死後、子の

高洋が北斉を建て「神武帝」と追尊した。「運之鄴」の「之」とは、儒学の基本テキストである経書を石碑に刻した儒教石経をさす。印刷による同版大量複写が可能となる宋代以前は、もとのテキストを誤写なく伝えることは困難であった。このため各種のテキストに生じた誤りを訂正し、正しい文字と文章とを広く、また永く後世に伝えるために、後漢朝以後、幾度となく、経書のテキストを碑に刻



して立てることが行われた。後段の表を参照。

高歓が石経を洛陽から新都となる鄴へ運んだのは武定四年（五四六）のことである。上文が欠けているが、このとき高歓が運ぼうとしたのは、後漢・靈帝の熹平四年（一七五）に起工され光和六年（一八三）に完成して洛陽の太学に立てられた熹平石経と、曹魏・斉帝の正始年間に（二四〇～二四九）同じく洛陽太学前に設置された正始石経（三体石経）の、それぞれの残碑であったと考えられる。楊衒之の『洛陽伽藍記』（五四七年以後成書）卷三・報德寺条に、

開陽門御道東有漢国子学堂。堂前三種字石経二十五碑、表裏刻之。写春秋・尚書二部、作篆・科斗・隸三種字、……、猶有十八碑、餘皆残毀。復有石碑四十八枚、亦表裏隸書、写周易・尚書・公羊・礼記四部。……武定四年、大將軍遷石経於鄴。

とあり、北魏時代には熹平石経と正始石経の残石が残されていたことが述べられている。儒教石経については既に多くの研究があるが、張国淦『歴代石経考』（北平来薰閣、一九三〇年。江蘇広陵古籍影印、一九九四年）が詳細かつ網羅的であるほか、熹平石経については徐森玉撰『馬衡先生遺書 漢石経集存』（科学出版社、一九五七年）が馬衡氏収集の全拓影を掲載している。また拙稿、江川武部「漢熹平石経研究の現状と課題―附 日本所藏熹平石経刻石・拓本調査―」（『明大アジア史論集』第7号、二〇〇二年二月）には、二〇世紀以後に発表された漢・魏石経に関する研究文献リストも附されているので参照されたい。

（四）河陽の岸に至りて水に没し、其の鄴に至るを得る者は其の半ばに盈たず 「河陽」は現在の河南省孟州市。古くから黄河の渡し場（盟津または孟津ともいう）が置かれて、洛陽から偃師を経て河を渡り北行する際の要衝であった。

（五）隋の開皇六年、又た鄴自り載せて長安に入る 武定四年（五四六）に鄴に運ばれていた石経は、五七七年に北斉が滅ばされると、北周大象元年（五七九）二月に宣帝の命により再び洛陽に戻されていた（『周書』卷七・宣帝紀・大象元年条）。封演は「鄴自り載せて長安に入る」としているが、『隋書』卷七五・劉焯伝には「（開皇）六年（五八六）、運洛陽石経至京師。文字磨滅、莫能知者、奉敕與劉炫等考定。」とあり、石経残碑は、五八六年に洛陽から長安へと移されたことが記されている。北周大象元年（五七九）に鄴から洛陽に戻されていた石経残石を、長安に運んだとみてよいだろう。

（六）秘書内省に置き、議して補苴せんと欲す 「秘書内省」は秘書省をさす。隋の開皇年間、秘書省は、尚書・門下・内史・殿内の

各省とともに「五省」のひとつとされ、国家の典籍や図書を管理した。開皇六年（五八四）に長安（大興城）に運ばれた石経は、国学に立てられ（『隋書』卷三一・経籍志一）、前掲注（五）の『隋書』劉焯伝にみたごとく、当代きつての碩学であった劉焯（五四四～六一〇）と劉炫（五四六？～六一三？）が考定を行うことになったのであろう。「補苴」は補輯の意で、書物等の足りない部分を補うこと。

（七）隋の乱るや、造立の司は用て柱礎と為す 「隋乱」は隋末唐初の動乱をさす。煬帝の高句麗遠征（六一一～）をきっかけに、遠征軍への補給を担っていた楊玄感が反乱を起し（六一三）、その後各地で群雄が割拠する内乱へと発展した。乱は長期にわたり、隋が滅び唐が建国された後、二代目太宗の貞観二年（六二八）に朔方の梁師都が殺されてようやく終息をみた。「造立」はつくり立てることとて建築の意。「造立之司」は殿舎の营造建築を担当した将作監をさす。「柱礎」は柱の礎石。

（八）貞観の初、魏徵秘書監と為り 魏徵（五八〇～六四三）は唐初の功臣で字は玄成、山東曲城（山東省掖県）の人である。出家して道士となり、隋末に李密の瓦崗軍に入った。李密が唐に降るとそれに従い入唐した。太宗のときに諫議大夫となり、貞観二年（六二八）に秘書監となった。『梁書』『陳書』『北齊書』『周書』『隋書』の各正史のほか、『群書治要』の編纂に携わった。六四八に亡くなり昭陵に陪葬、諡は文貞。

（九）其の相い承伝せる拓の本は、猶お秘府に存り 「拓之本」は、隋のときに大興城に運ばれた石経残碑の、拓本であろう。「秘府」は秘書省のこと。秘閣ともいう。宮中の図書や重要な記録を保管する機関。

（一〇）天寶中、予は太学に在り、博士諸生と共に経籍の失正を論ず 「太学」は唐朝の教育機関すなわち官学のひとつ。京師には太学を含む六学二館（国子監・太学・四門学・書学・算学・律学・弘文館・崇文館）が設けられていた。それぞれ入学資格や専門が異なっており、太学の入学資格は、五品以上官の子孫・三品官の曾孫・勳官三品以上有封者の子とされ、生徒の定員は五百人であった。学生たちは百名ずつ五組に分かれてそれぞれ経書を学び、太学博士三人（正六品上）と助教三人（従七品上）とが、彼らの教育に当たっていた。封演が太学にいた正確な時期は不明。

なお、唐の官学で教授されていた経書は、『孝経』『論語』のほか、『礼記』『春秋左氏伝』（以上を「大経」という）、『詩経』『周礼』『儀礼』（以上を「中経」という）、『易経』『尚書』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』（以上を「小経」という）の十一経であった。

（一）蕃は海内を寇し、文儒の道は消ゆ 「海内」は国内のこと。「蕃寇海内」とは、玄宗天宝一五載（七五五）に起こった安史の乱（七五五～七六三）をさす。「文儒」は学者や儒者をいい、戦乱の世の中であって、学問の道が廃れることを嘆いたのであろう。

（二）今に至るまで四十六年、兵革未だ息まず 「兵革」とは戦争をさす。安史の乱は代宗広徳元年（七六三）に史朝義が殺されて終息したが、唐朝は乱の際に内地に置かれた藩鎮の掌握に苦しみ、各地で大小の衝突が繰り返された。安史の乱勃発の年（七五五）から四十六年後を「今」とみると、徳宗貞元一七年（八〇一）となる。このことから、封演が『封氏聞見記』を執筆した時期はこの前後と考えられている。

（三）石経の事も、亦た河の清を俟つなり 「俟河之清」とは黄河の水が澄むのを待つという意味。古来より黄河の水が澄むことは天下太平の象徴とされており、また一方で、とてもかなわない望みをさす言葉でもある。封演は、戦争のない平和な世となって石経の建立が行われることは、とうてい不可能であろうと考えていたのかもしれない。しかしその後、文宗の大和七年（八三三）に唐石経の起工が行われ、四年後の開成二年（八三七）には、易・書・毛詩・礼記・儀礼・周礼・春秋左氏伝・春秋公羊伝・春秋穀梁伝・孝経・論語・爾雅の十二経全二一七石と、五経文字・九経字樣一〇石の、全二二七石が完成した。この開成石経は毀壞されることなく、現在陝西省西安市の碑林博物館に収蔵・展示されている。

### 【現代語訳】

後漢の明帝のとき、公卿たちが五経（の経文）の相異を批正しようとした。そこで呂不韋の墓を開いて、そこに納められているであろう、「（秦の始皇帝による）焚書以前の古い『詩経（魯詩）』と『尚書』によって、「現在のテキストを」正したいと述べた。論者たちは古の……（以下欠）。高歓が宰相となると、洛陽から鄴へ石経を運んだ。しかし「その道中」河陽のほとりで黄河に水没してしまい、鄴に到着できたのは半分にも及ばなかった。隋の開皇六年に鄴から「北周時代に洛陽に戻されていた石経を」長安に運び入れ、秘書省に置いて補輯を行おうと議論した。その後隋末の動乱の際に、「石経は」建物の礎石に使われてしまった。貞観二年（六二八）に魏徵が秘書監となり、これらを集めてみたが十分の一にも及ばなかった。「隋より」伝わる拓本は秘府に保存されていたが、石経（の碑石）

はこれ以後失われてしまった。天宝中、私が太学<sup>が</sup>にいたとき、博士や諸学生らとともに経籍の誤謬を正そうと議論をして、大唐石経を建立することを願い出ようとしたことがある。ところが、ぐずぐずしている間に安史の乱が起こり、学問の道は廃れてしまった。その後、今日に至るまで四十六年、戦乱はいまだ収まる気配がない。嗚呼、石経〔建立〕のことは、世が太平となるのを待つしかないのだ。

(江川式部)

## 中国儒教石経一覧

名称 (別称)	起工 完成	内容	書体	碑石数 (面)	所在地 現在地
熹平石経 (一字石経) (漢石経)	熹平四年 (175) 光和六年 (183)	易、書、魯詩、儀礼、 春秋経、公羊伝、論 語、校記、後記	隸書体	全 48 碑 (両)	洛陽太学 残石あり
正始石経 (三体石経) (魏石経)	正始年間 (240～249)	書、春秋経、左氏伝	古文、篆 書、隸書	書・春秋経が 28 碑、左氏伝 は初めの部分 のみか (両)	洛陽太学 残石あり
開成石経 (唐石経)	大和 7 年 (833) 開成 2 年 (837)	易、書、毛詩、礼記、 儀礼、周礼、左氏伝、 公羊伝、穀梁伝、孝 経、論語、爾雅、五経 文字、九経字様	本文楷書 標題隸書	全 114 碑 (両)	長安太学 西安碑林博 物館 全碑
蜀石経 (広政石経) (成都石経)	広政元年 (938) 広政 21 年 (958)	孝経、論語、爾雅、易、 毛詩、書、儀礼、礼記、 周礼、左氏伝 ※左氏伝巻 18～、 公羊伝、穀梁伝、孟子 は北宋以後完成	楷書	不詳	成都 残石あり
北宋石経 (二体石経) (嘉祐石経)	慶暦元年 (1040) 嘉祐六年 (1061)	易、詩、書、周礼、礼 記、春秋、孝経、論語、 孟子	篆書 楷書	不詳	汴京太学 残石拓のみ
南宋石経 (紹興石経)	紹興 5 年 (1135) 紹興 13 年 (1143)	易、詩、書、左氏伝、 論語、孟子、礼記、中 庸、大学、学記、儒行 経解五篇	楷書	不詳	臨安太学 仁和県学 杭州孔廟石 経閣 87 碑
清石経 (乾隆石経)	乾隆 56 年 (1791) 乾隆 59 年 (1791)	易・書・詩・周礼・儀 礼・礼記・左氏伝・公 羊伝・穀梁伝・論語・ 孝経・爾雅・孟子	楷書	全 189 碑 (両)	北京太学 北京孔子廟 全碑